

二段へ 早川章次郎
三段へ 吉武吉雄

○六月二十二日無綬者月次勝負の結果

四級へ 香下玄人、平岩猪三郎、村山義一、信夫長三郎、神尾金三郎、相澤修一

○九月二十九日講道館有段者月次勝負の結果

二段へ 石渡泰三郎

一三 明治四十一年史

明治四十一年より同四十三年までは、記録少なく殆ど勝負表のみを以て埋められてゐる。この頃は、開部以来戦闘力の最も旺盛なる時代であつて、一城の主たる力量を有する四段三段の巨豪踵を接して出で、都下の諸校を睥睨して、赫々たる武威を東都に輝かした時代である。されば講道館を始め、他校への派遣試合に於ても、幾多の目覺まさき勇戦猛闘の活劇が演ぜられたるは想像に難からざる所であるが、茲に纏つた記録を掲ぐること能はざるは、編者の大いに遺憾とする所である。

(一) 卒業生送別紅白勝負

二月十六日、午前八時開催。

(紅)

(白)

小山勝三 戸川修一

深井清太郎 宮倉基

近藤英一 北村孝治

(袈裟固)石塚彌之助 荒木順三

小關鶴 大瀧龜之助

岡島清之助 上野稀雄

青木定吉 大隅登山

(袈裟固)上原千馬太 加藤喜三郎

鷺山半助 南榮

(足外刈)稻田稔 幸島正路

(足外刈)大橋藤八 郑濱崎

(足外刈)高木一雄 新

(足外刈)大石勝一郎 高木梅雄(右背負)

(背負投)

基

石川元亮 松下義光

久保伊一郎 戸川勝藏

大矢知 久留島微一

盛田文造 田中和

熊田實 西信忠

(大腰)設樂哲夫 川口辰藏

(大腰)中村千吉 金子誠三

(大腰)茂木三千藏 今泉辰雄

(大腰)川口喜一郎 藤江金平(袈裟固)

(大腰)大野政顯 江口重國

(大腰)島泰次郎 荒井憲

(大腰)大橋藤八 戸梶萬里志

(大腰)高木梅雄(右背負)

(大腰)吉田五郎

(大腰)川合清一

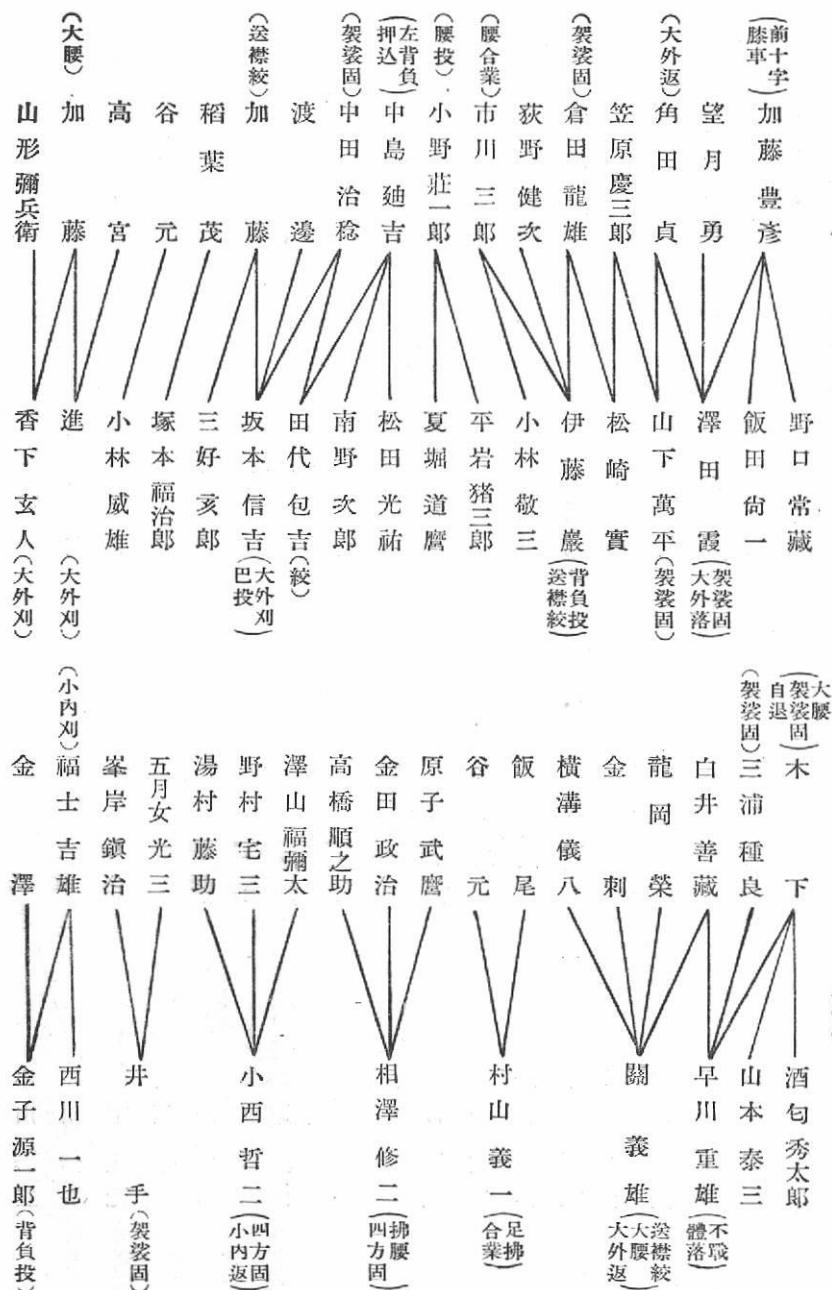
(大腰)濫谷松造

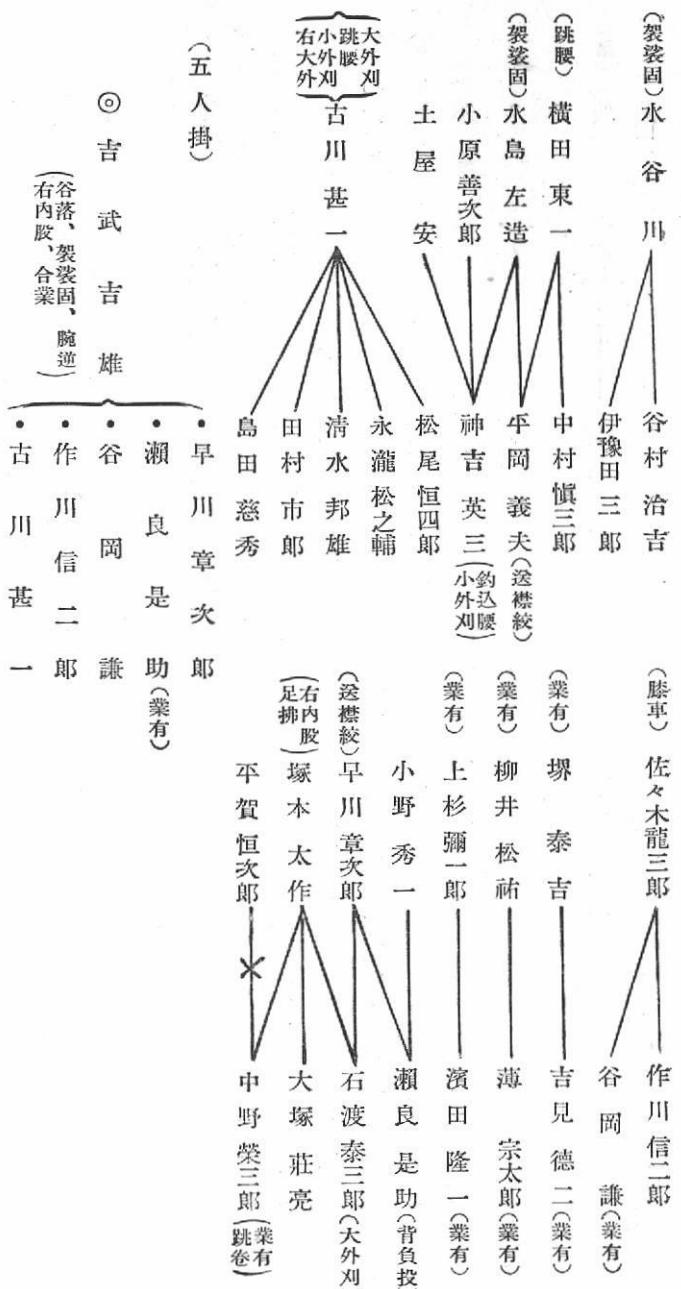
(大腰)大橋藤八

(大腰)山中四郎

吉田双之助 同横捨身

(大外刈)大石勝一郎
(同、大外刈)
(横捨身)





尙當日賞品を授與されたる者左の如し。

體育會長並に部長寄贈

稽古着一枚宛 大矢知基、關義雄、古川甚一

近衛歩兵第三聯隊將校團寄贈

大ナイフ 壱挺 中野榮三郎

舊師範内田良平氏寄贈

日本刀 壱振宛 吉武吉雄、塚本太作

朝日新聞社寄贈

賞 脣 壱 個 平賀恒次郎

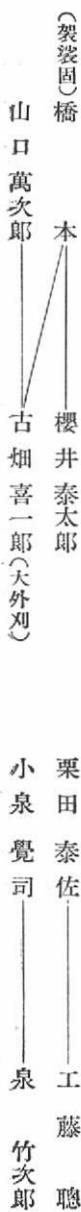
(二) 部長更迭(福澤氏新任)

明治三十六年以來部長として、大に我が部の爲に盡瘁する所ありたる青木徹二氏此の年辭任せられ、福澤三八氏其後任を諾せらる。福澤氏は明治三十年前後、部員として活動せられた先輩であつて、その純潔清廉なる人格は當時人々の模範であつた。こゝに我が部と縁故淺からざる同氏を部長として迎ふることを得たるは、一同の慶祝に堪へざる所であつた。爾來同氏は大會其他種々の會合ある毎に來場して、能く其任を盡された。

我が部は前部長に對する感謝と、新部長に對する歓迎の意を表せんとして、五月二十四日午前と午後の二回、紅白勝負を舉行した。午後の對戦は左の通りであつた。

(紅)

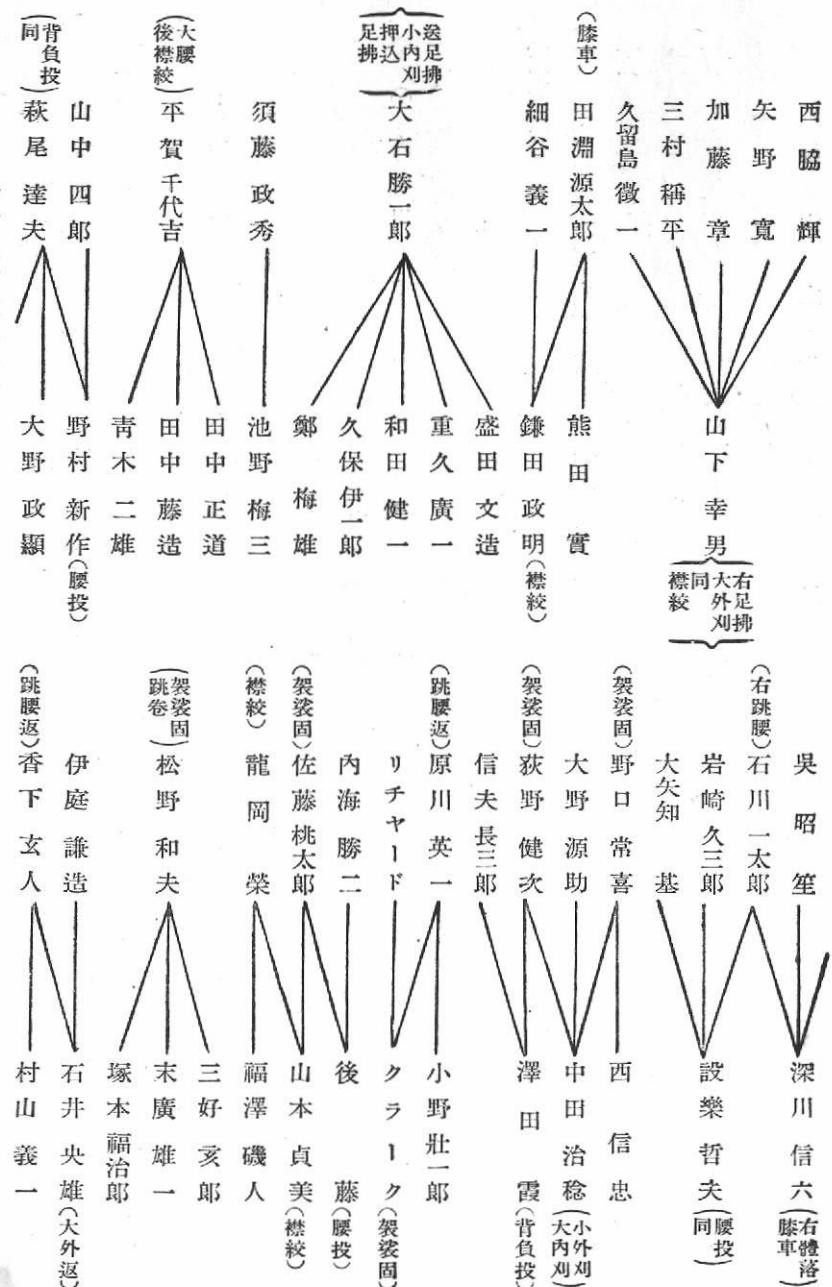
(白)



(製袋固) 橋 本 櫻井 泰太郎

山口 萬次郎 古畑 喜一郎(大外刈)

栗田 泰佐 工藤 聰
小泉 覚司 泉 竹次郎



早川重雄 中村壯吉(膝車)

(押込) 清水耕作 木村成松

澤山福彌太

(合業) 金田政治 高橋順之助

午後五時終了其れより五人掛

松村松之助 小西哲二(後絞)

伊庭謙造

◎古川甚一

(左腰投、右跳腰、左腰投)
同左、支釣込足、左腰投

高橋順之助

(三本勝負)
平賀恒次郎對中野榮三郎の三本勝負は引分

(九人掛)

西澤清
伊豫川一
千葉強

高橋順之助

小原善次

伊庭謙造

(上十字) 峰岸鎮治

千葉強三

伊豫田三郎

清水邦雄

西川一也

副將松尾恒四郎

五月女光三

西川一也

副將松尾恒四郎

押込

合業

跳腰

送襟絞

押込

合業

跳腰

合業

跳腰

合業

跳腰

合業

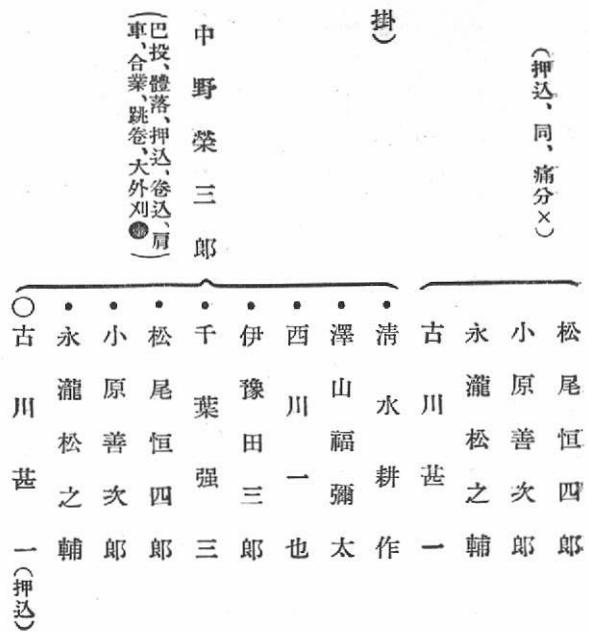
合業

合業

合業

(押込、同、痛分×)

(九人掛)



(三) 第十八回大會

十一月二十二日、午前中總勢七十名を紅白に分ち、各々四級を大將（紅は石井央雄、白は中村隆三）として行ひたる試合は、紅の勝に歸し、それより午後に入つて外來選士と部員との間に、左の如き取組があつた。

三本勝負(有級者)

(一) ○(青) 鐘崎武雄	稻葉茂	(九) ○(高輪) 相原彌之助
(一) ×(錦) 中尾利治	大矢知基	(一〇) ×(錦) 山中道夫
(一) ○(井) 山口千吉(返業)	中村慎三郎	(一一) ×(講) 塚本福治郎
(四) (日) 伊藤巖	三井稔(絞)	(一二) ×(講) 品田豊憲
(五) ○(青師) 吉沼	中田治	(一三) ○(附) 中島廸吉
(六) ○(附) 西本直	代包吉(背負投)	(一四) ○(高工) 松田哲
(七) ×(中央) 田邊綾夫	好亥郎	(一五) ○(附) 小西哲
(八) ×(日) 三田谷正毅	代吉	(一六) ○(水) 湯村藤助
守田龍海	好亥郎	(一七) ×(井) 大津武敏
谷正毅	代吉	(一八) ○(高工) 品田豊憲
守田龍海	好亥郎	(一九) ×(體) 中島廸吉
谷正毅	代吉	(二〇) ○(附) 松田哲
守田龍海	好亥郎	(二一) ○(高) 大津武敏
谷正毅	代吉	(二二) ○(附) 小西哲
守田龍海	好亥郎	(二三) ○(高) 松田哲
谷正毅	代吉	(二四) ○(高) 小山禎之助
守田龍海	好亥郎	(二五) ○(附) 五月女光三(背負投)
谷正毅	代吉	(二六) ○(水) 峯岸鎮治
守田龍海	好亥郎	(二七) ×(附) 田代信德
谷正毅	代吉	(二八) ○(水) 金田政治(大外刈)
守田龍海	好亥郎	(二九) ×(井) 後藤政治(大外刈)
谷正毅	代吉	(三〇) ○(高) 田代信德
守田龍海	好亥郎	(三一) ○(外) 木村成松(合業)
谷正毅	代吉	(三二) ×(外) 種子島季彦
守田龍海	好亥郎	(三三) ×(水) 島村山義一
谷正毅	代吉	(三四) ○(水) 茂木三千藏(大外刈)
守田龍海	好亥郎	(三五) ○(水) 泰次郎(背負投)
谷正毅	代吉	(三六) ○(水) 關澤修二
守田龍海	好亥郎	(三七) ×(井) 義雄(絞)
谷正毅	代吉	(三八) ○(水) 金田政治(大外刈)

内田氏勝負之形

講道館投之形

(有段者)

○○(明) 福田常雄 (足逆刈)

(二五) (早) 土屋澤正

(二六) (横) 石渡泰三郎

(二七) (帝大) 加藤藏之助

(二八) (野) 濑良是助

(二九) (東洋) 岩健造 (背負投)

○○(講) 高橋順之助

(三六) (早) 西川一也 (痛分)

○○(東洋) 清水邦雄

○○(松) 松村松之助 (大外刈)

○○(日) 金澤誠茂 (合業)

○○(高商) 則武貞吾 (合業)

○○(東洋) 松野和夫 (合業)

○○(講) 佐藤傳治 (押込)

○○(高工) 大塚田義磨 (痛分)

○○(講) 神津幸福 (痛分)

○○(高) 矢田部雄吉 (背負投)

○○(高商) 福島蒸二 (體落)

○○(早) 松永 (大外刈)

○○(明) 泽山福彌太 (大外刈)

○○(高師) 木庭源三 (左腰)

○○(東洋) 尾藤信助 (押込大腰)

(三段) 塚本太作
(四段) 石渡泰三郎
(三段) 五月女芳三郎
(中村愛作)

伊豫田三郎
福島蒸二
谷村治吉
澤山福彌太
千葉強三



(六) 雜記

幹事の更迭

三田山上の道場時代に於て、既に其勇名を現はし、之を内にしては部内を統制して士氣の作興を圖り、之を外にしては對外戦の主將若くは中堅となりて吾が黨の威力を發揮し、興隆時代より數年後に來らんとする黃金時代の橋渡しの役を勤められたる幹事湯本芳三郎、吉武吉雄及び盛田保三の三氏、此の年社會の人となれるに付、後に斯道の大立物となれる中野榮三郎、石渡泰三郎並に塚本太作の諸氏が其後繼者として幹事に就任せられた。

中村氏の歸朝歓迎

先輩中村愛作氏は、明治三十八年本塾卒業後、米國遊學の途に上り、ハアヴァアード在學中其處に柔道のクラスを設けて學業の餘暇同好の士を指導せしが、時恰も北米には山下前師範あり、堀切、秋山、小泉氏等同窓の有段者あり、相携へて各所の俱樂部又は種々の會合に臨み、或は柔道の精神を説き、或は其妙技を演じて、一時は北米に斯道の花を咲かせたのであつた。其後歐洲を巡遊し、無事歸朝せられたのは七月十五日であつたが、時恰も夏期休暇に入る際なりし故、歸朝歓迎の催しは十月四月初秋の候を俟つて開かれたのである。

當日は左の如く部員總出の大紅白勝負が行はれたが、此の勝負後主賓自らも柔道着に身を固め、現役若手五人抜きを試みられたるは、元氣尙盛んなりと言ふべきであつた。

(紅)

吉田

森本 良藏

櫻井泰太郎

久留島 健三郎

豊島 山人

福島 要

石川

岡西 一夫

長島政義

渡邊

吉田

森本 良藏

下川健太郎

松下義光

大塚文治

大塚文治

(白)

泉 竹次郎

森本 良造

久保伊一郎

岩田虎雄

山下幸男

岩田虎雄

倉成龍之助

岩田虎雄

川口喜一郎

岩田虎雄

加藤 章

岩田虎雄

大石勝一郎

柳澤徳治

倉田 龍雄

池野梅三

三代川明治 森 健介

福澤磯人 菅井國之助

玉井長三郎 澤田守

山形彌兵衛 萩尾達夫

稻葉茂 谷正毅

末廣雄 本信吉

田代包吉 中島廸吉

三代川 陸質郎 龍岡義雄

香下玄人 土屋義雄

村山義一 島崎吉

澤山福彌太 清水耕作

松野和夫 小西哲二

(五人掛)

中村愛作

瀬谷古松平
良岡恒四
是川義四
助謙一郎夫

中村壯吉 松村松之助

高橋順之助 千葉強三

五月女光三 伊豫田三郎

福士吉雄 永瀧松之輔

清水邦雄 松尾恒四郎

田村市郎 鈴木鐵太郎

平岡義夫 濱良是助

古川甚一 塚本太作

谷岡謙 大將中野榮三郎

石渡泰三郎 大將平賀恒次郎

・高橋順之助

吉武吉雄

千葉強三

○○○○●

・堺谷岡

泰謙吉助

○瀬良是

吉

月次勝負其他

一月二十六日午前九時より午後五時半迄に、清水邦雄、永瀧松之輔兩氏引分の取組を殿りとする百十二番組の月次勝負があつた。

六月十三日午後一時より七十二組の月次勝負が行はれ、最後の取組土屋安氏は跳腰一本を以つて湯村藤助氏を破つた。

十一月七日幼年組紅白勝負舉行され、塚本福治郎氏を大將とする玄武班（總勢二十二名）と、伊藤巖氏を大將とする朱雀班（總勢二十三名）相對峙して戦つたが、遂に玄武班の勝利に終つた。

進級一括

部員の増加と共に進級者も隨つて多きを加へたるを以て、以後幼年組及び成年組共二級以上の進級者のみを掲載することとした。

○一月十二日講道館鏡開式に於て

初段へ 上杉彌一郎、鈴木鐵太郎、柳井松祐、曾木清、安達士門

二段へ 小野秀一、瀬良是助

三段へ 山田又司

○一月廿六日月次勝負の結果

幼・組二級へ 永瀧松之輔

二級へ 松尾恒四郎、千葉強三、朝倉萬盛、峯岸鎮治、福士吉雄、五月女光三

二級へ 小原善次郎、清水邦雄

○二月十六日卒業生送別大紅白勝負の際

二級へ 關義雄、小西哲二

一級へ 神吉英三

○六月十三日月次勝負の結果

二級へ 松野和夫、松村松之助、高橋順之助

一級へ 千葉強三、福士吉雄

○八月二日講道館に於て、過ぐる六月の紅白勝負の結果

二段へ 堀泰吉、秋山孝之輔

三段へ 石渡泰三郎、早川章次郎、宮部修、黒江潮、大塚莊亮

四段へ 五月女芳三郎

○八月十五日講道館月次勝負の結果

初段へ 松尾恒四郎、平岡義夫、土屋安

○十月四日紅白勝負の結果

二級へ 香下玄人、龍岡榮、清水耕作、澤山福彌太、土屋義雄、村山義一

(五) 柔道部後援會の設立

附 三田柔友會

我が柔道部は、體育會中最も盛大な部であつて、部費の如きも他の部に比し、最も多額を支給せられてゐたのであるが、對校試合、大會、遠征等々常に多事多端であつた爲め、財政は常に困難であつた。

然るに明治四十年前後は學生界の柔道勃興時代とも云ふ可き時代であつて、我部も斯界への飛躍を企て、稽古のやり方も根本より改善しようといふので、當時野心満々、西班牙、滿洲に勇躍すべく、靜に英氣を養つて居られた飯塚先生に無理にお願ひして、三十九年に我部に來て頂いたのである。然るに先生を遇する物質的方面は何うであるかと云ふと、薄給の外、何も差上られなかつたといふ窮状にあつた。

依つて、現部長の柴田氏が關係して居られた日蓮宗大學に柔道部が出來た時に、先生を師範に仰がせ、又普通部より高工に入學した宮部修氏が、同校に柔道部を設立した時にも、師範として先生を迎へさせ、兩校より毎月若干の別途收入を得られる様にした次第である。人格、技倆、勝負力、共に秀でたる大先生を、如斯有様で遇する事は頗る禮を失することではあつた。部員は勿論先輩も他の塾生達も先生に親しみ、部員の稽古も猛烈熱心となり、時には無遠慮に先生の宅に押かけて行つて御馳走になることもあり、先生を中心として互に英氣を養ひ、皆が一團となつて進んだので、柔道部は茲に傳來の美風を發揮し、更に技術勝負の上に於て、當時學生界の第一人者となり、部は愈々發展して來たので、先生も多年

の宿望を捨てゝ吾部の爲めに一生を捧げようと、腰を据へられたのである。

當時、部を中心として先生を遇する良法なきや、と云ふ問題が盛に起り、其結果先輩及び當時の幹事が發起人となつて左記の規則の下に慶應義塾體育會柔道部後援會を組織し、舊部員及び部に特別好意を有つ人々より一口年參圓の後援會費を徵し、飯塚先生に對する物質的待遇の改善を計り、一面部費の不足を補ふ事となり、これが具體化されたのは明治四十一年である。併し初めは會員數も少なく、事務的にも缺陷があつたので豫定通りの收入無く、從て先生に對し年二回薄謝を差上る位の事しか出來なかつたのである。又先生に對して其後後援會より、金二千圓の生命保險を附けて上げたのであるが、それが爲す可き事の一小部分を爲したに過ぎなかつた。

後援會創立當時、同人の多くは世間多數の武術専門家が、其行動に彼れ是れ非難される様なことの多いのは、要するに收入が不充分であることが主なる原因であり、殊に柔道家は比較的その勝負的生命が短いから、其教へを受けたる『アマチュア柔道家』は此點を大に考慮して、専門家をして後顧の憂なく活動せしめ、柔道家として充分延びて貰ひ、斯道の發展を計らねばならぬと云ふ大きな考を有つて居つたのである。

後援會の規則は左の通りであつた。

慶應義塾柔道部後援會規則

- 第一條 本會は慶應義塾柔道部後援會と稱す
- 第二條 本會は柔道部師範優遇を以て目的とする
- 第三條 本會會員は柔道部出身者及篤志家を以て組織す
- 第四條 本會會員は五ヶ年間毎年金參圓を五月及十一月に分ち醵金するものとす

第五條 前條の釀金は一人にて幾口にても負擔し得るものとす

第六條 右釀金は自己の便宜上取纏め釀出する事を妨げず

第七條 本會一切の事務は柔道部幹事に委託し部長之を監督するものとす

第八條 本會には柔道部後援會と稱し其誌上に於て會員の動靜及會計事務を報告す可し

以上の次第で柔道部後援會は、最初飯塚師範に對する物質的援助を主眼として生れたのであるが、一方に於ては資金の徵收意の如くならず、他方に於ては仕事に對する経費が益々嵩むので、再び先輩の間に何とかもつと後援會を改善して、其範圍を擴大し、更に大發展を講すべしとの議が起つて來た。結局大正十五年春、後援會といふ名を廢して之を三田柔友會となし、左記の如く規約を改正して、青木氏を會長に、金澤氏外先輩二十一名を顧問、石渡氏を常任顧問として、委員中には各時代の同人中より峰岸氏外十三名を擧げたのである。これが現在の三田柔友會の始まりである。

又關西方面に於ける先輩も、昭和三年十月に至り、吉武氏の盡力に依つて、三田柔友會關西支部なるものを設け、本部と聯絡を保ちて、柔道部に對し熱烈なる精神的應援と、相當の物質的寄與に力を協せることとなつた。吉武氏今は東京に在り、委員長として本會の維持發展に力を盡してゐる。

三田柔友會規約

第一章 總則

第一條 本會ハ三田柔友會ト稱ス

第二條 本會ハ會員相互ノ親睦ヲ旨トシ義塾體育會柔道部傳來ノ精神ヲ維持シ同部ヲ後援指導シ以テ義塾々風振興ノ

本源タラン事ヲ期ス

第三條 本會ハ事務所ヲ當分ノ内東京市日本橋區本町三ノ十二松本篤太郎方ニ置ク（之は後に變つた）

第二章 會員及役員

- 第四條 本會ハ慶應義塾體育會柔道部舊部員並ニ緣故者ラ以テ組織ス
- 第五條 本會員ヲ別チテ正會員贊助會員客員ノ三種トス
- 第六條 正會員トハ一口以上五口以下ノ本會々費ヲ負擔スル者ヲ謂フ
- 第七條 贊助會員トハ本會ノ趣旨ニ贊成セラレ本會ニ援助ヲ與フル者ヲ謂フ
- 第八條 客員トハ慶應義塾體育會柔道部現師範並ニ舊師範及同部選手ヲ謂フ
- 第九條 本會ニ會長一名顧問若干名委員長一名委員若干名ノ役員ヲ置ク
- 第十條 會長ハ本會ヲ統理シ外部ニ對シ本會ヲ代表スルモノトス
- 第十一條 委員長ハ會長事故アル場合其職務ヲ代理ス但シ重大問題ニ對シテハ顧問ノ意見ヲ問フ事ヲ要ス
- 第十二條 委員ハ委員長ヲ補佐シ本會ノ常務ヲ處理スルモノトス
- 第十三條 會長ニハ會員中ノ有力ナル先輩ヲ推戴ス
- 第十四條 顧問及委員長ハ會員中ヨリ會長之ヲ指名ス
- 第十五條 委員ハ委員長ノ指名ニ依ル
- 第十六條 委員ノ任期ハ滿一ヶ年トス但後任委員決定迄其職務ニアルモノトス
- 第十七條 役員ハ無報酬トス

第十八條 委員ハ委員會ヲ構成シ委員長ヲ議長トシテ本會ノ重要案件ヲ議決シ會長ノ決裁ヲ受クルモノトス

第三章 資 金

第十九條 本會々員ハ次ノ如ク資金ヲ醵出スルモノトス

一 正會員 一口以上五口以下一口ニ付一ヶ年金五圓五ヶ年繼續トス（但シ五ヶ年後繼續セザル時ハ贊助會員ト爲ス）

二 贊助會員 一時資金ヲ醵出スルモノトス

三 客 員 無會費

第二十條 本會ノ資金ハ古河銀行ニ保管ヲ托ス

第二十一條 本會資金ノ拂込ハ一年壹回トシ其時期ハ委員長ノ定ムル所ニ依ル

第二十二條 本會ノ決算期ハ四月一日ニ始マリ翌年三月末日ニ終了シ其都度決算報告及會員名簿ヲ會員全部ニ配布スルモノトス

ノトス

第四章 事 業

第二十三條 本會ハ會員相互ノ親睦ヲ圖ルニ必要ナル事業及柔道部ニ對シ適當ノ援助ヲ爲ス

第二十四條 本會ハ毎年一回總會ヲ催シ時々例會ヲ開ク

但シ會合費ハ其都度別ニ申受クルモノトス

(六) 飯塚先生後援會の由來

吉 武 吉 雄

明治三十九年飯塚先生を迎へた頃は、先生もまだ大野心を藏して居られ、滿洲シベリヤが戀しくてならぬ時代であつたが、その頃の講道館には、柔道の強い人は何人もあつたが、塾の先生として、殊に幼稚舎及び普通部の幼少年を教へて、人格を以て自然に導いて行く、と云ふ必要がある塾の先生としての適任者は、見出しえなかつた。然るに先生は、人格高潔で、而も塾生であられたと云ふ關係から、塾風も勿論承知して居られるので、無理に引留め策を講じたが、塾の體育會も極々の貧乏で、此大家に報ゆるに月給僅に六拾圓也を以てした。之れではとても困るのであるが、どうにも仕方がなかつた。然し先生に接する事は、兄に接する如く、先生も亦吾々に對しては、弟に接する如く親まれ、誠と親みとの綱でたうとう引留めて了つた。

當時官立學校に柔道を教授された先生方は、學生中二三の特別な人とは親しみもし、學生も亦先生の爲に盡しもしたが多くは稽古する時以外は甚だ冷淡であり、卒業後等は更に冷淡であつたので、是等の先生の行末は、實にみじめであつた。口に武士道を高唱し、四角張つてのみ居るが、活躍期の比較的短かい事も明である柔道の先生に對する彼等の態度は、實に不快千萬であつた。又是等の先生連中も、收入の點で多少は繩張爭的の事から、時に或は見苦しい事もあつたらしい。

そこで當時の吾が部員の主なるもの間には、武術でもやるものは、其師に對する禮は如斯すべきであると云ふ手本を天下に示して、四角張つて居る官立學校の連中に一泡吹かしてやらうぢやないかと云ふ事になり、又飯塚先生にも不充分ではあるが、衣食足りて禮節を知ると云ふ事もあり、實際問題としても餘りに物質的待遇が悪いので、一つ先生の後援會

を組織すべしと云ふので、先輩にも相談してタシカ明治四十一年の秋頃に飯塚先生後援會を組織したのであつた。之れを其後大正十五年頃の總會で三田柔友會と改め、更に會の事業の範圍を擴大して今日に至つたのであるから、本來の精神を忘れられては甚だ困る事になると考へ、茲に其の由來を書いた次第である。

一三 明治四十二年史

(一) 卒業生送別紅白勝負

二月二十一日午前九時開催、午後四時終了。

(紅)

(白)

(絞込)

和氣律次郎

山田喜三

(絞外返)

小口清美

伊井利一郎

(絞込)

石原豪雄

岩田彌藏

(絞外返)

西虎次郎

仁科久次郎(大内返)

(絞込)

仲池唯謙

小池豊朗(絞同)

(大外刈)

酒井萬馬

長島政義(足拂)

(絞込)

店綱信次

吉田政助

(大外刈)

石田初之助

河野久次郎

(絞込)

吉田政助

大内義一(足投)

(大外刈)

沈觀恒

近藤久

(絞込)

徳弘虎雄

望月雄吉(足拂返)